信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果（広報用）

プログラム名	**後発開発途上国における農業・農村開発の課題認識によるグローバル意識の醸成**	
学部・研究科名	農学部	
プログラム 実施期間	2019年2月18日 ～ 2月28日	
研修先(国・都市・施設名)	カンボジア・王立農業大学	
参加者数 ： 8名		知の森からの支援者 ： 2名
プログラム概要	信州大学農学部の学部生を対象に，参加者がグローバルな視点を持ち，開発途上国の農業・農村の課題に気づくと同時に日本の農業・農村の課題にも目を向け，さらに異文化の中で英語を使用したコミュニケーション能力向上の意識を醸成することを目的として，カンボジアの農村において海外農学実習を実施する。学術交流協定校であるカンボジア王立農業大学の学部生とともに，カンボジアの農村における農家の生業や暮らしぶりを調査し，農業・農村を取り巻く現状と課題について議論を行う。王立農業大学の学生とともに，調査準備から調査実施，データのまとめ，発表まで，すべて英語でコミュニケーションをとりながら作業を行う。	

実施状況・成果

参加学生は，カンボジアの農業・農村の暮らしや生業について，王立農業大学の学生とともに体験し農家から直接話を聞く機会を得た。発展する都市と農村のギャップを感じつつ，農村での多様な生業と実際の暮らしぶりを体感することで，日本やカンボジアの都会と比較し，本来の生活の豊かさや資源循環型社会について考えるきっかけとなった。

農業・加工業の実態を見ることで，解決すべき技術的／経済的な課題があることに気づき，また，同時に，日本の生活や農業のシステムが決して「優れた」ものではないことにも気づきを得て，学生にとって農学を学ぶ上での新たな視点を持つ機会になった。

調査準備・実施・まとめ・発表にかかるRUAの学生との共同作業において，英語を使用したコミュニケーションを実践し続ける機会となり，参加学生はコミュニケーション能力・語学力の重要性を実感することができた。

学生の声①-農学部　学生

農家調査にあたって感激したことはうまく物質が循環されていることであった。破棄物利用がうまく行われているように見えた。小さい規模で農家を経営し国内平均収入以上の収入を得ていることに驚いた。
どう生きなさいというような正解がない中で、様々な人がいることがやはり面白い。もちろん海外だけでなく、日本国内にも同じように異なる文化をもつ人がいて、日本を知ることも大切であると感じる。

学生の声②-農学部　学生

世界の食料不足や温暖化に伴ってこれからますますグローバル化していくと考えられる。日本にいるとしても、海外雇用も増加していくなかで目を向けずにはいれないと思われる。基本的には相手の文化を理解することや日本の考えに固執せず寛容な考えを持つことが重要である。しかし、ビジネス的な面では自分の意志を明確に表すことも必要である。よって、他に干渉されない独自の視点で物事を考えることも大切にしていきたい。

また、海外に出て行く際は先進国であることを全面に押し出さず、相手と同じ目線になることで他国がまね出来ないようなビジネスの展開の仕方も出来るのではないかと思う。

学生の声③-農学部　学生

私は今回の実習で自分の将来について再び考え直しました。以前は海外で支援活動をしたいとだけ考えていましたが、実習を終えて、海外で何か行動を起こす前にまずは日本の畜産環境を改善したいと思いました。今後、就学中や就職して日本の畜産について学んでいるときは海外の人々と交流する機会は少ないかもしれません。しかし、日本で十分学んだ後は海外で支援活動をしたいです。この目標のために、就学中の専門科目の勉強はもちろん語学の勉強も進めていきます。

学生の声④-農学部　学生

能動的に異文化に触れることのできる機会が多くありました。また、現地の学生との会話の時間が十分にあり、良い関係を築けたことが非常に嬉しかったです。このような機会が長期休暇中にあるということが、長期休暇を有意義に過ごすことに繋がっていると感じています。

農家から得た情報をグループごとに共有しとりまとめ

農家を訪問し生業に関する情報を収集、酒造りも体験